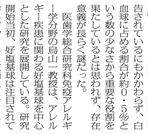
知と癒しの匠が世界を先導する医科歯科の研究

国立大学法人
東京医科歯科大学

大学を世界レベルの研究拠点に押し上げる文部科学省の支援事業「研究大学強化促進事業」が今年度からスタートした。政府の日本再興戦略に裏付けされた、低下傾向にある日本の研究力強化を目指す大型事業だ。東京医科歯科大学は、研究に関する総合力が高い大学として評価され、同事業に採択された。同大では、リサーチユニバーシティ（RU）として、学部、研究科だけでなく附属拠点の力を結集して研究力の強化を図っている。本特集では、特に力を入れている免疫や再生医療分野の研究、それらを支える研究所、センターを紹介する。

免疫

早くから好塩基球に注目 善玉・悪玉 両面が判明


医歯学総合研究科免疫アレルギー学分野　畠山一教授

もはや国民病とまでいわれる花粉症をはじめ、アレルギー性皮膚炎や喘息、これらを総称する過敏性疾患は、食の欧米化などが要因とされ、増加傾向にあるとみられている。原因は、遺伝的な要素が関係していると考えられているが、その発症メカニズムには不明な点が多く、根治治療も確立されていない。

白血球のひとつである「好塩基球」は、130年前から存在が報告されているにもかかわらず、白血球全体の0・3％程度と数が少なさから重要な役割を果たしていると注目されてきた。

医歯学総合研究科免疫アレルギー学分野の畠山一教授は、アレルギー疾患に関わる塩基球を中心とした研究を展開している。研究開始当初、好塩基球は注目されておらず、さらに未解明な点が多かったため、検出方法や装置、試薬などの研究ツールは存在しなかった。そこで畠山教授は、好塩基球を除こう・除去する抗体や好塩基球を特異的に認識する抗体を開発し、好塩基球の数や機能に少なからぬ影響を及ぼしていることを明らかにした。これは